

## 仮設住宅での買物事情 宮古市田老地区での「たろちゃんテント」の試み

南 正昭 岩手大学

岩手県三陸沿岸の宮古市田老地区（被災前、ほぼ 1600 世帯 4500 人）は、過去に幾度も津波被害を受けており、高さ 10m の大規模な防潮堤が X 字型の 2 線堤として街中を横断し、津波防災の先進地として全国に知られていた。残念ながら、3 月 11 日の東日本大震災で市街地が壊滅的な被害を受け、166 人が犠牲となり、851 棟の流出を含むほぼ 1100 棟に及ぶ建物被害を受けた。

被災直後は、9 つの避難所に分かれて生活をはじめていたが、被災から 1 ヶ月を経て、田老市街地から北へ車で 5 分ぐらいにあったリゾートホテル「グリーンピア三陸みやこ」の屋内スポーツ施設 1 箇所に集約された。現在は、敷地内に建設された仮設住宅 400 余棟への入居が完了し、避難所は閉鎖されている。

この被災者の街で、津波で店舗が流出した店主たちが話し合い、自分たちの手による店舗づくりが始まった。すでに 4 月 6 日には第 1 回の会合をもち、その後、週 1 回の集まりを続けたとのことだった。

県から無償で借り受けた 10m 四方のテント 2 張りで「たろちゃんテント」（写真 1）が開設に漕ぎ着けたのが 5 月 15 日だった。当初の予定よりは開設が遅れたが、第 1 回の仮設住宅入居日と重なり、そのことがむしろ幸いしたと関係者はいう。

それまでの避難所生活とは異なり、仮設住宅では一定の自立した生活が求められる。食事についても、避難所での食品の支給や炊き出しの配給から、仮設住宅での食材を用意しての調理する食生活が始まりだしたときだった。また仮設住宅では、閉じこもりがちにならざるを得ない。互いに顔を合わせ、コミュニケーションをとる場が求められていた。

たろちゃんテントの共同店舗は、そこから徒歩 3～4 分にある屋外プール敷地内やクラブハウス内にも広がり、現在、事業主ら 26 人で運営されている。食品、菓子、米穀、青果、乳類、日用雑貨、飲料、酒類、たばこ、靴、時計、写真、家電、自動車整備、理髪店など、生活に必要なものを購入できる仕組みができてきている。

ここで理髪店を経営する高橋さんは、防災士の資格をもち、津波防災まちづくりに以前から高い関心をもっておられる。田老の復興に向けた強い情熱をもっている一人である。市街地にあった店舗は流出した。仮設住宅に近いクラブハウス内に店舗を開いており、さらについ最近になって、流出した市街地内に仮店舗を開設した（写真 2）。「一番乗りで戻るんだ」と意気に燃えてのことである。

菓子店を経営する田中さんは、消防団分団長。田老名物になっていた「かりんと」を販売していた。国道沿いにあった店舗は流出した。自ら被災しながらも、震災直後から、防潮堤門扉の閉鎖、救急救命、遺体捜索等を懸命に指揮してきた一人である。

7 月 30 日には、たろちゃんテントの事業主らにより、「たろちゃん協同組合」が設立総会を開き発足した。たろちゃんテントのある同じ駐車場内に、建設中の仮設共同店舗を管

理運営する。現在基礎工事中で、予定を少し遅れて9月中ごろには完成の予定とのこと。完成すれば、10年20年はずっと構造と活用策の検討が進められている。浸水区域外となった住宅への移動販売も計画中であり、田老地区全体での商業の再生を目指している。

仮設共同店舗ができて、たろちゃんテントは残したい、テントは開放的な空間、人が集まりやすい、手押し車のお婆ちゃんも入りやすい、今後もテントの良さを生かしていきたいと、呼びかけ人の食品小売店主の箱石さんは語っていた。

復興につなげるための仮設住宅でのまちづくりの試みが、今日も続けられている。



写真1 たろちゃんテントの概観：8月10日撮影



写真2 理容タカハシ仮店舗（真ん中の建物）：8月10日撮影